

酪農の変貌と胎動

名誉会員 西 埜 進

酪農経営は、いま「量の拡大」から「質の充実」への転換期に立っていると思われるが？ いかがでしょう。そこで、本題は二つの離農—将来展望、飲用乳生産供給—意識改革、知識が資本—模倣の限界、などを会員各位に訴えようと思って書いたものである。どうか舌足らずのところがあったら会員皆様の英知で読み取っていただきたい。

—— 二つの離農 ——

全国の乳用牛飼養戸数4万4,300戸は前年の7%減で飼養頭数も195万1,000頭の3%減、1戸当たり飼養頭数が44頭で前年よりわずかに増加した(1995年2月、畜産統計)。一方、国立大学のほとんどが学部か学科で制度上の農離れが進行して、畜産学科が「生物生産学科」とか「応用生物学科」などになってしまった。最近まではこの農離れが一つの流行になったように見えていた。「国立大学が時流におもねて農離れするのはおかしいではないか」と何時の日であったか、日本農業新聞のコラム欄に書かれていた。さらにコラム氏は「農の軽視は土に根ざした文化が衰退する」と嘆いている。

× × × ×

それでは国立大学でなぜ離農の雪崩現象が起きたのだろうか？ 昭和60年代からの農学部第二次改革は、教育領域—食料の安全確保はもとより生物工学技術、流通および販売にまで拡大、教育組織—大学科制・コース制、ならびに研究組織—大講座制などのリストラがタテマエとなっている。ホネネは、ネーミング、教員の定数増加あるいは昇格問題などがなんとなしに見え隠れする。

何はともあれ、タテマエであろうとなかろうと、大学自身が主体性を失うことなく、社会のニーズに答える新しい教育領域を積極的に取り入れて、個性的な教育をするのは至極当然のことで、また、研究の分野でも狭い領域にとどまることなく、専門の垣根を越えた学際的な考えを持つのも当たり前と言える。

× × × ×

畜産の将来は、かつて昭和40年代における農林漁業問題調査会による答申の中で、畜産は「これから伸びる生産部門」に位置付けられていた。しかし、現在は「これから余り伸びない、あるいは衰退が予想された生産部門」の稲作とか養蚕の方が利益の多い儲かる生産部門になっている。とくに生糸の需要は化学繊維の廉価な量産のまへには衰退するはずであったが、いまではわが国の生糸の需要は以前より増加して世界有数の生糸輸入国になってしまった。

× × × ×

畜産の役割は基本的には食糧生産と繊維生産の二つになるが、世界の食料事情から食糧生産の方が繊維生産よりも重要になる。畜産(乳用牛・肉用牛)による食糧生産の手段として、歴史的(第1～第3課程)にまた将来的(第4課程)に下記のような過程を持つことになる。

第1過程－遊牧的な畜産→牧畜社会

第2過程－穀物類を栽培し、後には種実類も栽培する→農耕社会

第3過程－過剰の穀物が収穫されると、これを利用して畜産物を生産する→近代畜産

第4過程－化学または工業技術の支援で、穀物と種実から畜産物を製造する段階である→生物型生産システム

近代畜産の企業化は、土地化が進み、穀物生産が過剰な状態で、豊富な購買力によって成立するものである。しかも、畜産物の生産は植物蛋白質を動物蛋白質に転換する効率が余りよくない；最近の10年間に生産効率改善面のみをみるべき技術進歩がなかった；また畜産には穀物生産に比べて、もう一つの段階を余分に必要とし、これに時間とリスクを伴う；などの問題を含んでいる。

—— 飲用乳生産供給 ——

最近は牛乳生産をめぐって地殻変動が進行し、将来的には全国の牛乳生産量が飲用乳に特化され、北海道はいま以上に飲用乳供給基地としての役割が大きくなるものと予想される。北海道から本州への生乳移出量は平成元年くらいから年間20～30万トンの間で推移していたのが、昨年度は猛暑のせいもあってか約43万トンにまで増加した（表1）。生乳移出量は昭和60年より平成6年の間に10倍以上になったが、牛乳（製品）移出量のそれは1.4倍程度であった。さらに本年度は46万トン位まで増加が見込まれ、関西がその4割強を占める有力な市場となった。しかも昭和60年の生乳移出量が道外移出量（牛乳製品＋生乳）の23%であったのが平成6年度のそれは68%に達した。

表1. 牛乳(製品)と生乳の道外移出量 (単位:千トン, %)

	牛乳(製品)	生乳	計
昭和60年	144(77)	42(23)	186(100)
61	148(80)	37(20)	185(100)
62	162(62)	98(38)	260(100)
63	172(52)	160(48)	332(100)
平成元年	174(46)	204(54)	378(100)
2	184(42)	250(58)	435(100)
3	187(38)	303(62)	490(100)
4	192(39)	301(51)	493(100)
5	188(39)	291(61)	479(100)
6	204(32)	431(68)	639(100)

(1995年 北海道酪農協会)

受け入れ先の大阪府（関西）では、飼養戸数が平成5年は昭和60年の37%に相当し、飼養頭数のそれは54%に減少した。牛乳供給量は25万トンから28万トンの間に推移したが、この間、牛乳自給率は11%前後にまで落ち込んだ（表2）。さらに、全国牛乳生産量に対する北海道のシェアは平成3年（1991年）の39%が、年々高まって2000年には50%前後になると見込まれている。

表2. 大阪府の酪農および生乳需要の動向

	飼養戸数 (戸)	飼養頭数 (頭)	生乳供給量 (千トン)	生乳自給率 (%)
昭和60年	270	8,870	252	17.2
61	250	8,510	254	16.0
62	210	8,030	273	14.3
63	190	7,360	279	13.6
平成元年	180	6,460	284	12.7
2	170	5,710	283	12.3
3	130	5,620	278	11.5
4	110	5,300	280	10.9
5	100	4,810	274	11.0

生乳供給量：(府内生産量+府外からの搬入量)-府外への搬出量

生乳自給率：府内生産量/生乳供給量×100

(1995年 農水省経済局統計情報部)

したがって、北海道は原料乳生産地帯、都道府県は飲用乳生産地帯という役割分担が崩れ、本道も飲用乳生産地帯となる。本州の牛乳需要が増加する夏の気候が冷涼であるから、輸送手段の整備によって(1995年9月北海道新聞)は、全国の生乳供給基地になれる条件を持っている。

—— 知識が資本 ——

戦後の50年間に続々と輸入飼養管理の導入が行われ、畜舎ではスタンション牛舎、開放牛舎およびリーストール牛舎とまことに忙しかった。わが国の酪農近代化に向けた輸入飼養管理の貢献を否定はしないが、ここで指摘したいのは、黒船到来に対する受け入れ態勢が極めて貧困で単なる模倣に終始したことである。

× × × ×

わが国の酪農は、伝統的歴史が浅く、酪農の伝承的な経験技術では外国より確かに遅れている。しかし、酪農家のなかには経験技術の優れた人々が大勢いるし、指導者はよく読みよく語ることができ、しかも研究者は優れた研究実績を数々発表している。それにもかかわらず、わが国には三者間の調和と連携、そしてこれらをトータルした飼養管理システムのなかに“ある個別技術”だけを取り入れても個別技術に関連して意外な問題を生ずることがある。

実際の問題として、酪農家、指導者および研究者の酪農に対する問題意識が一致していなければ、わが国の酪農を飛躍的に発展させるようなシステムのできるはずがない。本来、酪農による真の受益者は、酪農経営によって生計をたてている酪農家自信であって、指導者でなければ、研究者でもない。つまり酪農家自体が経営改善に対する意欲が乏しければわが国の飼養管理システムができっこない。

× × × ×

世界はいま経済的な大改革のときを迎えている。そのベースは知識である。かつては土地、労働力お

よび原材料など有形の資本であったが、いまは無形の知識が新しい富を創造する。「今日あることは明日もある」という直線的な予測が成り立たない時代、とアルビン・トフラーさん（第三の波などの著者で知られる米国の未来学者）が講演されている。

× × × ×

例によって読みづらい雑文となった。どうも文章を書くのが苦手で、あなたの文章はぎこちないと言われ、文章を読むと肩が凝るとも言われる。試験データはAかBか、それともAかBか、あるいはAでもBでもないか、いずれかになる。本稿がそのいずれでもなく、単なる問題提起に止まったことをお詫びする。